

幼児の絵の発達段階とその援助と指導について

若杉雅夫（絵画）

1. はじめに

現在保育現場において造形表現（活動・遊び）が、多くの時間に渡って設けられている。しかし現場では、なぜ造形活動に多くの時間を割いているか、その本質が甚だ曖昧になっている様である。その顕著な例としては、作品主義的な傾向に造形活動が捉えられていることであろう。つまり作品を完成させるため結果を得るための活動に終始し、作品発表が主目的の、子供の心を無視した造形活動に重きが置かれているケースが多く見受けられる。では本来造形活動（遊び）はなぜ保育の現場で盛んに取り入れられているのか。それは幼稚園教育要領に書かれているように豊かな感性を育て、表現する意欲を養い、創造性を豊かにするということと共に、幼児の心身の発達を促すのにより効果的で不可欠な活動であるからである。

外界の様々な事象を吸収しようとしているこの時期に、造形活動を通して本来人間が持っている多感な感受性（好奇心・探究心・興味・関心・驚き）を高め、また活動の過程によって獲得される身的・知的発達が、望ましい幼児期の発育を促すのである。

造形活動の本質を見失わず子供にどう指導・援助していくべきか、本稿では幼児期の絵の発達段階を踏まえながら考察することにする。

2. 指導と援助について

ここでは幼稚園教育要領・保育指針が改訂されて以来、盛んに用いられる援助という言葉を中心に考えてみることにする。

保育現場では指導の対語として頻繁に援助という言葉が用いられるが、その意味するところは読み取り手によって色々な解釈が出来るといっていいただろう。本来の意図を損なわず、指導と援助という言葉の基本的なところからその意味合いをまず考えてみよう。

教育という言葉から探ると、指導—即ち教えるところ、援助—即ち育てるところという枠組みができる。さらに描画表現の面から具体的に説明すると、指導とは描画材料の使用法・画面構成上での約束ごとを教えることであり、援助とは子供たちの想像力・洞察力・やる気等が豊かに育つように導くことであろう。つまり子供個々をよく観察し、その理解に努め各々のパーソナリティに合った助言・共感・励ましを根気よく行うことである。

ここで大切なことは、指導と援助をバランス良く生かすことである。つまり、指導と援助のバランスがとれてこそ、子供の主体的表現を引き出すことができ、その子らしい心身の発育が順調に促されるのである。

だが一斉的な指導が強すぎると、子供の表現は指導者の色に染まってしまい、その表現意欲も萎縮してしまう。本来子供の絵とは、子供個々が新鮮な目で事象を捉え、その感動をその子らしい目で率直に表現していること

が大切なのである。大人から見て上手な絵が、子供にとって良い表現では決してない。心身の発育にともなってその子なりに自主的に表現することが、子供の成長には不可欠なのである。

大人（保育者）は指導と援助という言葉の意味を確実に理解し、個々の子供と接していかなくてはならない。

3. 造形活動（絵画製作）の過程—三系論

子供が造形活動を進めるにはそれなりの過程があり、それに沿って製作活動が行われるとっていいだろう。具体的例を上げてここでは説明してみよう。

母親の絵を描く場合を例にとってみると、まず最初に子供はその表情をイメージとして頭に思い浮かべるであろう。つぎにそのイメージをいろいろな描画材料を使って画面に定着させる。そうして出来上がった絵を他者に見せて自分の意志が伝わった時点で製作が完了する。以上子供の絵の製作はこの三つの過程を経る。このことを造形の三系論と呼び、上記したように創造の系—技術の系—伝達の系に分けることができる。では大人はこの三つの過程の中でどう子供に関わっていけば良いのであろうか。それぞれに考えてみることにする。（林健造「表現過程における三系論」より）

a. 創造の系

ここでは子供のイメージがより鮮明に浮かぶように色々な言葉掛けをすることが大切である。母の絵の場合、「今朝お母さんどんな朝ご飯作ってくれた？」等、子供個々の想像力・意欲を上手に導くことが必要なのである。そのためには、大人は子供に対する日頃の観察と、それを元にした理解が不可欠となる。

つまり創造の系とは援助が主となる過程であろう。

b. 技術の系

頭にイメージされた世界を描画材料を使い

画面に定着するのがこの段階である。ここではクレヨンの持ち方・絵具の溶き方・筆の持ち方・混色等雑多な指導事項が存在する。この過程で大切なことは、子供個々のパーソナリティを良く理解しながらその発育にあった指導と援助を繰り返すことである。又結果にこだわらず子供の戸惑いややり直しを温かく見守ってやること、つまりフィードバックする過程を大切にすることを第一に心掛けなくてはならない。

ともすると大人は結果主義・作品主義を急ぐあまり造形活動の本質を忘れがちである。そういったことが結果として子供の自主的で自由な表現を妨げ、その子らしさを奪うことになってしまう。

c. 伝達の系

このような過程を経て作品が完成されるがしかし、それで子供たちの表現が完結したわけではない。子供にとって絵は作品ではない。それは日記であり、日常的な言葉と同一なのである。とすれば一日の出来事を子供が親に話すように、その描かれた絵（言葉）を大人は暖かい愛情を持って理解し、興味関心を示す必要がある。そういった大人意思表示によって、子供は自分の気持ちが伝達されたことを認め、その心が充足された時点でその表現は完結する。

以上造形表現が完結するまでの過程を述べたが、その中で適切な指導と援助を行うことによって子供の自由な表現が広がり、順調な心身の発達をも促すのである。

4. 幼児の平面表現の発達段階

一般的にいつて造形表現の芽生えは、平面的感覚より立体的感覚が先行すると言っている。それは乳児期まで溯れば歴然としている。たたく・しゃぶる・転がすなどの探索活動から始まり、紙を丸める・破る・ちぎる・くしゃくしゃにしたりして自身の欲求を

満足させる機能的快樂までは、立体的活動と言っているだろう。平面活動はそれより少し遅れて1歳頃からその芽生えが始まる。その発達段階は、ローウェンフェルドを始め多くの研究者によって確立され、現在に至っている。

これ以降は、幼児の平面（絵）の発達段階（1歳頃～6歳頃）を順を追って説明し、その適齢にあった指導と援助の在り方について考察することにする。

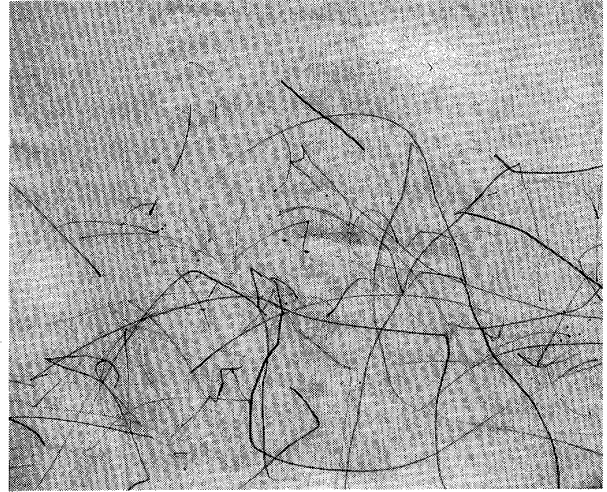
A. なぐりがき期 1歳頃～2歳頃

本来三次元的人間の感覚が平面表現に達するには、それなりの過程と表現の必然性が必要となる。ここで取り上げるなぐりがき期の表現の発端は、親や年上の兄弟の文字や絵を描く姿を見よう見真似で始める場合が多い。

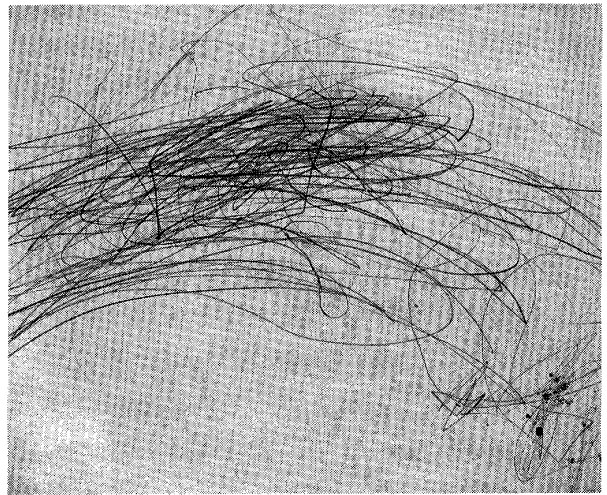
1歳頃～2歳頃の時期に現れ、平面表現の原初的段階であり、先に述べた機能的快樂の延長線上にある。つまり子供は何か目的があって線を描いているのではなく、ただ身体の動くままに描く線の軌跡を楽しんで、自己の欲求を充足させているだけなのである。その形態は子供の心身の発達によって段階的に分けることができる。以下その発達的变化を簡条書きにして説明する。

- イ. 方向性のない無秩序な短い線と点による乱画。 図一1
 - ロ. 左右に一定の方向性を持った息の長い線や、ジグザグ線が主となる乱画。 図一2
 - ハ. 螺旋形を主とした乱画。 図一3
- そして最後には子供が最初に獲得する図形、円が現れる。

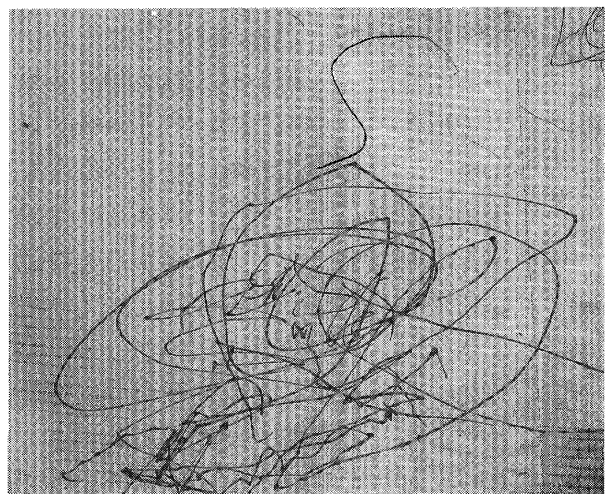
その他なぐりがきは、スクリブル・乱画・錯画とも呼ばれている。



1歳1ヵ月（女） 図一1
点と息の短い線



1歳5ヵ月（女） 図一2
左右一定の方向性を持った線



1歳11ヵ月（女） 図一3
螺旋形を主とした乱画

* なぐりがき期の指導と援助について

この時期は、水遊び・砂遊び・泥んこ遊びなどと同様に機能的快樂の範疇に入る。いわゆる何か目的を持って絵を描くのではなく、自己の本能のおも向くままになぐりがきし欲求を充足させているのである。

ここでの大人の子供との関わりは、子供が十分になぐりがきの活動ができるように環境を整えることである。得てして子供のこうした行為は大人の目には全く無意味な活動としか映らず、そのための環境整備どころか、なぐりがきする子供の活動自体をも邪魔してしまうことがある。環境を整えるということをも具体的にいえば、描画材料（鉛筆・色鉛筆・マーカー・クレヨン・クレパス・画用紙等）を用意し、同時に子供がなぐりがきしやすいように活動できる場を整えることである。

又画用紙の代用として新聞のチラシ・カレンダーの裏など廃物を利用しても良く、紙質の変化及び紙の大きさの違いによってもその表現は変わってくる。例えば大きなカレンダーの裏を与えた場合、その活動はよりダイナミックになることが多く、子供の欲求の充足や腕・肩の発達にも効果的である。その他鉛筆などの描画材料を色々変えて与えても、その描き心地や色の変化などの違いを、子供はなぐりがきしながら自然に学習し体感していくのである。

ここで気を付けなくてはいけないことは、いくら子供に自由になぐりがきの活動をさせるのが大切だといっても、描いてはいけないところに描いた場合は、そのことを子供にしっかり教えなければならない。つまり幼年時からやってはいけないことと良いことを躰けることも必要なことなのである。

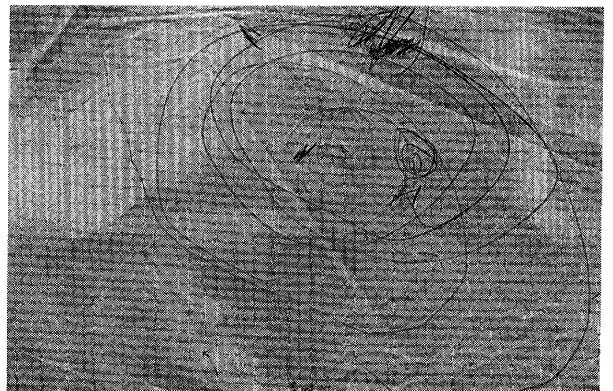
以上なぐりがき期の特徴とその接し方について述べたが、子供がこの活動を十分に体験することによって、心身の発達をスムーズに促し、そのことがより豊かな次の世界を築くための重要な資質となるのである。

B. 象徴期（意味づけ期）2歳頃～3歳頃

なぐりがきを十分に体験した後、子供が最初に獲得する図形一円が現れる。円を獲得することによって子供は初めてその内側を物化し、その周りを外とする概念が生まれる。

この時期はなぐりがき期後期の表現と一見同じようであるが、その意味は大きく変化する。つまり今までのように単なる線の遊びや、ただの図形としての円ではなく、そこには何かを描こうとする意図が内在している。これは子供の表現が機能的快樂から想像的遊戯に変化している現れである。

この意味づけを具体的に例えれば、子供の描く絵は大人から見ればなぐりがきや単なる円と何ら変わらないが、子供がその絵に「パパの顔」とか「牛さん」と何らかの意味を持たせていることをいう。 図-4



参考作品 2歳 (女) 図-4

「うしさん」

* 象徴期の指導と援助について

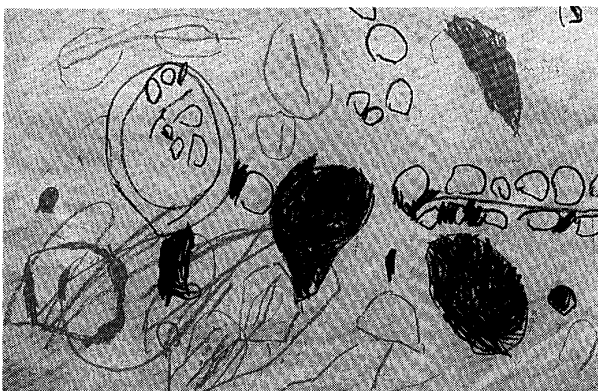
ここで大人が心掛けなくてはいけない第一のこととしては、不用意に子供の意味づけを否定して、そのものの形を指導してはいけないということである。最も大切な事は子供の意味づけをよく聞いてやり、その表現の理解に努め、共鳴・同調する態度を示すことなのである。そうする事によって、子供の表現意欲は益々高まり、自ら進んで意味づけ活動を繰り返していくようになるのである。大人の

常識的な物差しによる形の押付けは、却って子供の自主的な表現意欲を萎縮させ、その結果心身の発育を滞らせてしまう。

子供が表現活動を行うに当たっては、当然その表現の元となるイメージの源泉が必要となるが、そのことを子供自身で育む事は到底無理である。そのために大人は子供に源泉となるべき色々な体験をさせる必要がある。例えば公園に連れていくとか、絵本を読み聞かせるとか、とにかく時間と自身の体を使って子供に接していくことが大切である。

C. 前図式期 (カタログ期・並べがき期) 3歳頃～4歳半頃

この時期になると子供の絵は、人や木・家等の形を稚拙ではあるが大人から見てもある程度判別出来る様になる。基本形は円を主とし、題材は人・食べ物・動物などが多く表現される。しかし一つの空間として画面を組み立てる意図はまだ子供にはなく、また描かれた個々の形も何ら繋がりを持っていない。いわゆる自身で体験した中で印象に残っているものを日記、若しくは話し言葉のように画面に羅列しているだけである。 図-5



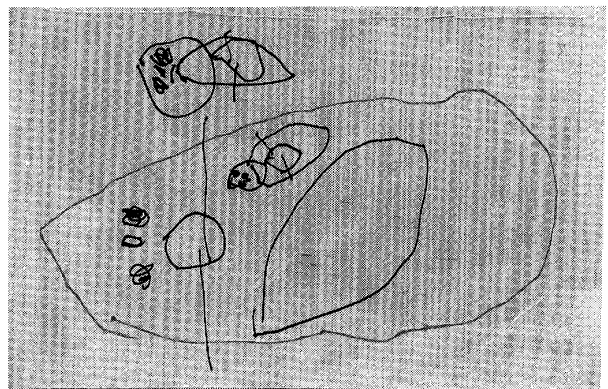
参考作品 2歳8ヵ月 (女) 図-5
前図式期初期 カエル・おばけ・おもちゃ

ここでの個々の形の形態の特徴としては、意味づけ期からの継続として、まず子供が最初に獲得する図形一円が中心となる。歪な円のための表現から始まり、様々な円の形態が発展的変容を繰り返して行く。以後、その形態について個別に説明する。

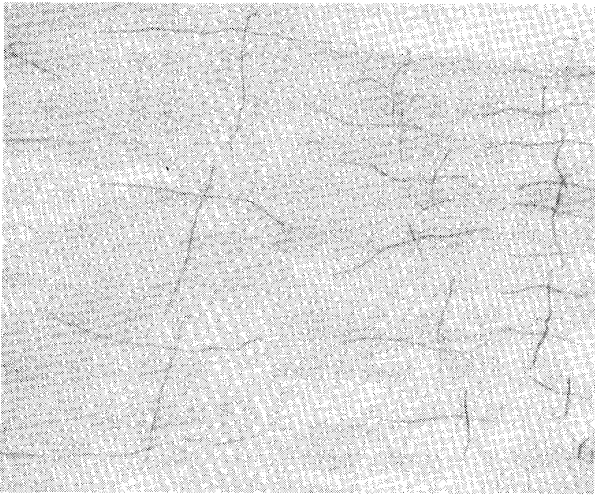
- 同心円 円を包む図形 図-5, 6
最も初期に現れる形態で、円若しくは楕円の大きさの変化によってその物を表す。
- マンダラ図形 放射形 図-7
円と十字形の直線を使って物の形が表現される。十字のみの表現も多い。
- 太陽図形 図-8
同心円または円を包む図形から、放射線状に線が出ている。
- 頭足人 図-9
太陽図形と同様の表現であるが、主に人を表現する場合に使われる。
図-9に示したように人の形が胴体頭部ともに同一化した表現で、円を包む形から手足頭髪が直接出ている。

その他の特徴として、固有色に囚われない色使いが上げられる。それは子供の自由な精神が豊かな色彩となって表れているのである。

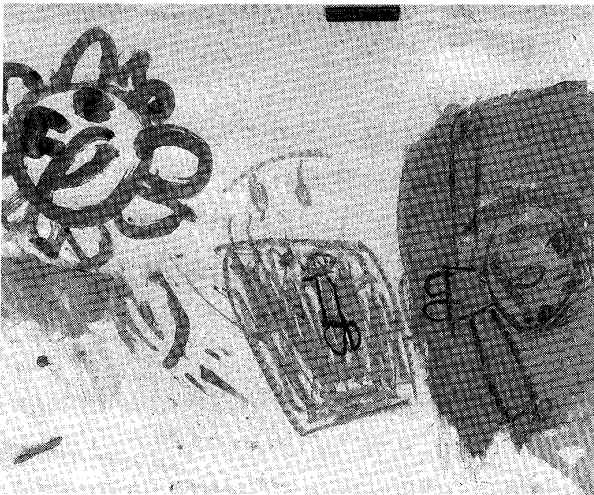
以上ここに上げた形態の特徴が、前図式期の子供の表現をおおよそ表している。



参考作品 3歳 (女) 図-6
ママ・わたし・赤ちゃん



参考作品 3歳 (女) 図一7
放散形



参考作品 4歳 (女) 図一8
太陽図形



参考作品 3歳 (女) 図一9
頭足人

* 前図式期の指導と援助について

ここでは象徴期同様、表現の源泉となるべきより充実した実生活での体験の場を作ることを中心、描画材料・製作場所などの設定をすることが、先ず大切なことである。

また大人の価値観で判断して、常識的な絵画空間や形を指導しないことである。そうする事が子供の素直な表現と、自主的な造形活動に熱中する姿勢を促すのである。

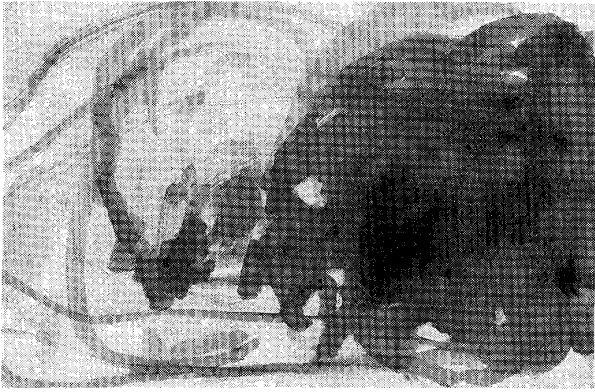
特にこの時期は心身の発達も著しく、自分が体験して見知った物をまるで話し言葉のように描き綴る。大人はその言葉を受け止め、その理解に努め、適切な言葉掛けをする必要がある。

3歳頃になれば色々な描画材料を使いこなすことが可能になってくる。この頃に水彩絵の具を描画材料の中に加えると、表現の幅はより広がる。クレヨン・クレパス・鉛筆などにはない技術的な約束事(筆の使い方・絵具の溶き方・混色・後片付け等)が多く含まれているとともに、描いたときの自由な感触、混色の面白さはいままでの描画材料とはひと味違った手ごたえがあり、そのことが子供の興味をそそり、絵を描いたときの楽しさが一層増す。

水彩絵の具での最初の表現としては、何かを描き表すことより、先ず材料用具の使い方に慣れることが大切である。子供が自然に水彩用具に慣れるよう水遊びや泥んこ遊びのように、十分に気持ちを発散させながら素材に慣れ親しんでいくことが望ましい。

水彩絵の具の活動の始めとしては、筆によるなぐりがき(ぬたくり)が適切であろう。それを十分に体験することによって無理なく自然に水彩用具に慣れ、また気持ちも発散されて内的欲求を満たすことができるのである。そしてそのことによって水彩絵の具による表現の幅も広がっていく。

図一10



参考作品 3歳 (女) 図-10

水彩絵の具によるなぐりがき(ぬたくり)

D. 図式期 (覚えがき期) 4歳半頃～8歳頃

前図式期までの子供の絵は一枚の絵画的空間として成り立っていなかったが、この時期以降絵画的空間として一枚の絵が表現されるようになる。がしかしその内容は見えるままを描くというより、知っていることを描くという表現が主である。又覚えた物の形を一定の図形のように表現することから、この時期を覚えがき期とも言う。

画面に描かれた個々の形もそれぞれ情緒的繋がりを持つようになり、場の設定としての基底線も現れ、頭足人から胴を具えた人間も表現される様になる。上または空の象徴としての太陽が現われるのもこの時期である。

その他この時期の大きな特徴としては透明的表現(レントゲンの表現)や大小の比例に無頓着な点が上げられる。この図式期の個々の形態的特徴(基底線・太陽・透明的表現・大小の比例無視・視点移動)を参考作品を示しながら説明してみる。

○基底線

画面を横に直線・波線などで二分割する線のことで、この線が引かれることによって具体的空間が表現される。つまりその線より下は地面若しくは水面であり、その線より上は地上が表現されるのである。基底線を獲得することによって子供の絵は初めて一枚の絵としての空間設定が整うのである。

その他周りを囲む線や、たとえ線を表していなくとも画面下を地面と想定している場合もある。又画面上に一本の線を引き空を表現するケースも多く見受けられる。このことは空間表現ということでは基底線と同類であろう。 図-11・12

○太陽(雲)

基底線が現れるとほぼ同時に、子供の絵の画面上には多くの場合太陽が描かれだす。これは子供にとって地上を象徴的に表現する記号のようなものである。

この太陽が描き表される期間は小学校低学年まで及び、この他に雲なども多く描かれる。 図-13・14

○透明的表現(レントゲンの表現)

この表現の形態を具体的に箇条書にする。

イ. 家や車の中の人が透けてみえる。

図-14

ロ. ズボンや上着の中の腕が透けてみえる。

図-15

以上ほんの数例を上げてみたが、その他個々の子供の感性の違いにより雑多なパターンが存在する。

この表現の根底には、知っているものは全て描き表したいという、子供の素直な気持ちの現れが在ると言っていいたいだろう。

○大小の比例なし

この表現の特徴は、大きな物も小さな物も現実の大きさを無視して描かれているという点である。このことは子供が大小の比例を全く理解していないから、こうなるという訳ではない。それは表された物への気持ちの大きさが対象の大きさとなって表現されているからである。 図-16

○視点移動

同じ画面の中で上から見た表現や横から見た表現等が混在している。 図-11・12

以上が図式期の表現内容である。



参考作品 5歳(男) 図-11

「庭の池に金魚が泳いでる」

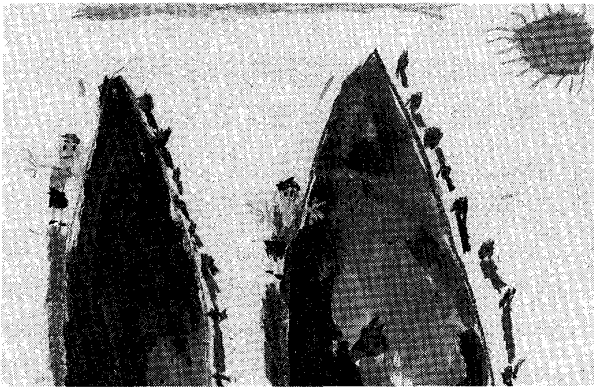
画面下に基底線。画面中央の池の視点と他の形の視点が異なっている。



参考作品 4歳(女) 図-14

「わたしのうち」

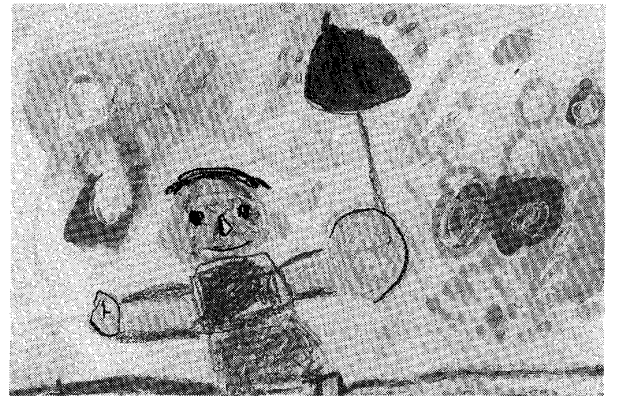
画面右上に雲。木の幹、家の中の私が
透明的表現で描かれている。



参考作品 6歳(男) 図-12

「山登り」

画面に描かれた山が基底線となっている。
山に沿ってに表された木は視点移動である。
足もとの道は時間の経過を表現している。



参考作品 6歳(男) 図-15

「あめふり」

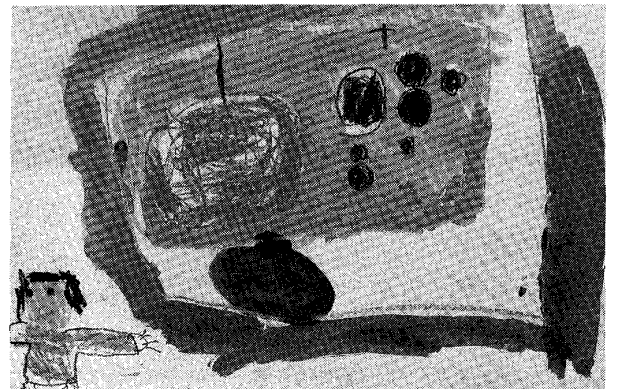
袖の中の腕、長靴の中の足を透明的表現
で描き表している。



参考作品 5歳(女) 図-13

「お洗たくするお母さん」

画面左上に太陽。洗濯をする母親の手が
印象的に描かれている。



参考作品 5歳(女) 図-16

「おやつ」

大好きな果物が大きく描かれている。

*** 図式期の援助と指導について**

ここでも前図式期同様、表現の源泉となるべきより充実した実生活での体験の場を作ることを心掛け、描画材料・製作場所などの環境を設定することが、先ず第一に大切なことである。

5歳前後頃から子供の知能の発達はその著しさを増す。この時期大人が形の描き方や物の固有色・空間設定などを教えると、子供は素直に言われたとおり表現しようとする。がしかしそのような指導によって描かれた絵は、子供の心からの言葉は聞こえなくなってしまう。また同時に形や色を指導することによって、子供が試行錯誤する過程を奪ってしまうのである。言い換えれば創造の過程でそれを表現するための不可欠な行為を取り上げてしまうのである。これでは、表現する過程で子供が獲得し得る、想像力・洞察力・興味・関心・やる気を養うことなど、到底出来なくなってしまうと言っていいだろう。一体何のための造形活動であろうか。

またこの頃になると、どうしても大人の目の尺度で子供の絵の善し悪しを評価してしまい、その絵が大人から見て理解しやすいということを基準として、上手・下手という言葉で子供に接してしまうことが多い。しかし上手・下手という言葉は、その意味自体何ら子供の情緒的感性に訴えかける言葉ではなく、却って子供自身の主体的表現の広がりを持滞させてしまう。

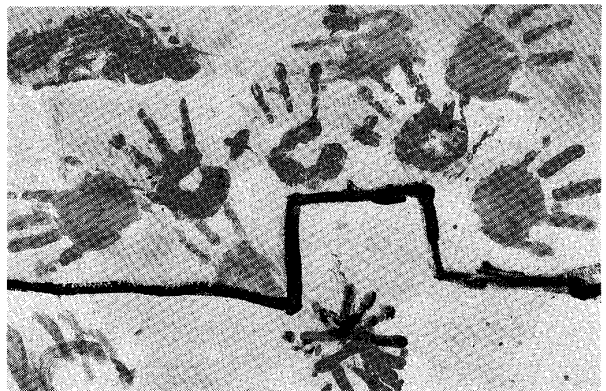
ではどう言葉掛けすべきか。先ず子供個々の情緒的広がりを理解することに努め、その気持ちに合った言葉掛けをする必要がある。例えばお母さんを描いた場合、大人は前述したように不用意に上手・下手と言った言葉を使わずに、その絵が表している子供の気持ちを読み取ることを心掛けなくてはならない。それにはその絵を出来不出来で判断するのではなく、その子らしい物の見方で、表現で、生命感ある絵になっているかを第一と考えなくてはならない。大人はその絵から感じ取っ

た自身の気持ちと、子供の気持ちを重ね合わせその時々言葉を選んで接する必要がある。たとえ不器用な絵であってもそこに母親の逞しさを感じ取れば「元気なお母さんが描けたね」とか「お母さん強そう」等、その絵から子供の気持ちを読み取り、共鳴・共感する言葉掛けが大切である。そこには当然日頃の子供に対する観察と、そのことから成る理解が不可欠となる。

又この時期になると絵を描くことに苦手意識を持つ子供が出てくる。こういった場合どんな子供にも無理なく自然に表現が楽しめるように、スタンプング・マーブリング・デカルコマニー・バチック・コラージュ等の描画活動を伴わない表現遊びを取り入れると、絵を描くことに馴染めない子供にも表現の可能性が広がっていく。

図-17

以上この時期に大人が心掛けるべきことは、イメージの源泉となる経験を積み重ねさせることと、子供が自主的に造形活動できるように環境設定すると共に、描画材料の基本的使い方を指導し、自由に表現させることである。その上で子供の素直な主体的表現を見守り、受け止めてやる態度が必要である。



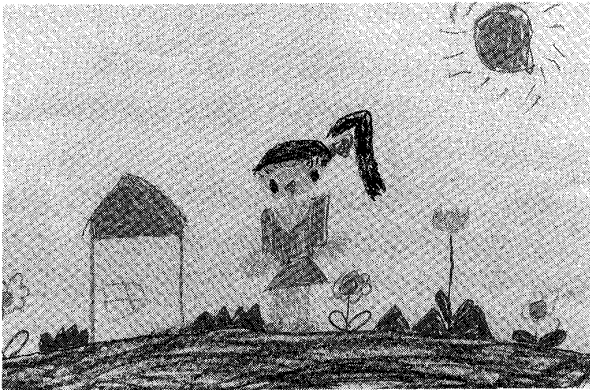
参考作品 5歳(女) 図-17
スタンプング

E. 概念画 5歳頃～9歳頃

概念画とは前項の図式期と重なって現れる表現である。

5歳頃になると外界のことをかなり理解することが出来るようになる。その中でもマスメディアの影響、又男の子らしき女の子らしさを区別する生活の中から、男女に分かれて類型的表現が目立つようになる。男の子の場合はアニメのヒーロー・怪獣・車、女の子の場合はアニメのヒロイン・花・人形などである。

図-18



参考作品 6歳 (女) 図-18
「おはなとわたし」

これらの絵はもの真似から出発する 경우가多く、その為どれも類似した表現になりがちである。そこには生活の中で子供が体験した実在的な喜びや、個々の子供独自の表現に欠け、パターン化した生命感を感じさせない絵になってしまう傾向が強く見受けられる。

ここで概念画を描かせてはいけないのかという問題が出てくるが、一般的な生活の中では、純粹培養でもしない限り概念画から子供たちの表現をそらすことは出来ない。又このことは、知っていることを言葉の代わりに絵で表現する図式期に於いては、当然起こりうるべき現象である。

では我々はどう対応するか、それはアニメよりおもしろい世界、つまり実体験での充実感や人とのコミュニケーションの楽しさ等、子供に十分体験させる時間を確りと設けてや

ることである。そのことにより子供の興味や関心は広がりを持つようになり、又創造の糧も心の中に蓄えられ、表現はより豊かに広がって行くであろう。 図-19



参考作品 6歳 (男) 図-19
「すいかわり」
自身の体験から描かれた絵

5. 結び

ここで述べた発達段階は国・人種・宗教の違いに関係なく同じ過程を経る。しかしその適齢は、生育歴・描画経験によって個人差が生じることを必ず考慮しなくてはならない。

尚発達に適齢については諸説あるが、ここでは現在私が実際に子供と関わって得た年齢を記載した。

画一化した現在の社会にあって、感性と創造力を養い豊かな人間性を育てるための一助として、造形活動はなおさら不可欠な状況になっているのではないかと考える。

その子自身の手で、考えで、生の素材を相手に試行錯誤、やり直しをしながら実際に物と関わって行く体験が、日常の事物を愛でる心を養い、自然に無理なく子供の心身の発達をも促すのである。大人はこれらのことを自覚し、子供の心の理解に努め、子供たちにより良い環境を提供し、充実した体験の機会を作る必要がある。

主な参考文献

- 1) 林建造 他：造形美術教育大系 1 幼児教育編，
10～29 美術出版社
- 2) 林建造：表現活動における三系論，日本保育学会研
究論文集 1975
- 3) V.ローウェンフェルド：美術による人間形成，黎明
書房
- 4) 創造美術協会愛知県支部：原色 よい絵・良くない絵
事典 黎明書房
- 5) 桑原実 他：幼児絵画製作教育法，東京書籍(株)
- 6) 井手則雄 他：園児の絵画・製作，誠文堂新光社
- 7) 幼稚園教育要領(平成元年3月)文部省
- 8) 保育所保育指針(平成2年)厚生省児童家庭局

参考作品資料

若杉造形美術研究教室 図一 1～19

— 児童教育学科 幼児教育 —